
東方空繰殿

包丁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方空繰殿

【Nコード】

N0083Q

【作者名】

包丁

【あらすじ】

犬を飼いはじめました。飼ってみると分かるけどなかなか癒されるもので……。ああ大自然。
んっ？大自然？
ここどこだよ？

第1話：なんだかんだで異世界に来て家を追い出されました。

人生生きている中で意味の分からない状況と言つものが存在する。

例えば学校から帰ってきたら机の上に、ベッドの下に隠してあったフェイクの18禁なアレはともかく、ばれないように教科書を加工しカバー中身をすり替えた少し危ない18禁のアレが積んであった状況とか

こういうように全く持つて理解が出来ない状況というものはたまにある。そう何故ベッドの下ではなく中に隠した18禁のアレまでばれてしまったのかとか、全く持つて理解出来ない。母親にはそういうものを発見するための探知器かなにかでもついているのかと勘繰ってしまうほどだ。

2

このままでは18禁なアレの隠し場所について3時間程語つてしまいそうなので話を戻して、今現在の理解出来ない状況について詳しく話したいと思う。あまりの理解の出来なさに無断無断うるさい某吸血鬼と対峙したポルなんとかさんみたいな心境である。

ある日、大学に行かず自主休講という名のサボリパチンコをしていた僕がパチンコで大分稼ぎ、ホクホク顔で家に帰ろうとしていた時から話が始まる。

スキップをしそうな程上機嫌で、回りの人が引くくらいテンションの高かった僕はふと視線を感じて視線のする方を見てみると道路

のど真ん中に濃い黒い色の子犬がねっころがつていて、こちらを凝視しており何故凝視されているか分からない僕はじっと子犬を見つめ返すことにした。

正直近くの人々は不審者を見るような眼差しを送っていたことであろつ。そんなこんなで子犬とメンチを切り合っていると地面が揺れるような振動を感じた。なんとなく気になったので子犬に勝負はこれからだぞいい気になるなと目で制してからしようがなく子犬から視線をずらすと、さっきまでメンチを切り合っていた子犬がいる道路に、軽く人間をミンチにできるようなトラックが結構な速さで迫っていた。子犬は動けないのかトラックが近づいてきても逃げようとしないので慌てて飛び出し、トラックに引かれそうだった子犬を助けた。

先に言っておくが僕はお人よしなんかではない。テレビで惨殺事件が起きても痛ましいとも思えないし、貧しい子供達のために募金をしようとも思わない。そういう人間だ、しかし先程まで目で会話をしていた相手を見捨てることは出来なかったようで、つい助けてしまったのだ。

僕的には一度救うために差し出した手は引つ込めることは出来ないと思っっているので、やむを得ず犬を我が家へと連れ帰ることにした。どうせ両親もいないので誰かにとやかく言われることもないと思ひ、助けた犬を抱えて犬へと持ち帰り少し汚くなっていた身体を洗い、餌を与えているうちにいつの間にか我が家の犬と化した犬。

はて？成長したら放すつもりだったんだがと餌箱に餌を入れながら首を傾げ、尻尾を振って餌を催促する犬に見つめる。

「ハッハッハッハッ」

止めて！そんな綺麗な目で見ないで！！と言いたくなるような眼差しを送られ、たじろぎながら餌箱を床へと置き、犬へと与える。餌箱へと顔をつっ込み凄まじい速さで餌を食べていく、犬を眺めながら煙草を吸う。

「・・・・・・・・やれやれ」

自分に呆れながらもボウとしてしていると裾を引つ張られたので、引つ張られた裾の先を見ると犬が構つて構つてと裾に噛み付いていた。欲望に忠実な犬に呆れた眼差しを送りながらも犬のおでこを撫でる。この犬のおでこには何故か膨らみがあり、そこを撫でると嬉しそうにするのでついそこを撫でてしまうのだ。

馬鹿みたいに黒い、犬を撫で回し撫で疲れたところでふと思い出した。

犬に名前をつけてないと

名前と言うものはとても大事なもので、自分がどこに所属しているかをハッキリとさせ、また名は体を表すと言うようにその物の在り方すらも表現するなくてはならないものなのだ。そして何かを名付けるというのは自分の所有物であることを決定し、他者に示唆するということである。故に我が家の犬にも名前をつけてやるのが当然と言えよう。

というわけで犬にも名前をつけようと思ったのだが、今の今まで犬だとかおいだとかで呼び付けていたので今更名前と言われても多少決めにくいものがある。簡単にポチだとかクロだとかつけることは、中学時代に中二病をこじらせくぎゅう病に成りかけた僕には許

されないことなので一つかっこいい名前をつけてやろうと思考の海へと深く潜る。

黒から派生する名前を思い浮かべていくことにしよう。クロ、ブラック、ダーク……ダサいな。黒犬繋がりでグリムとかがいいかもなと思ったもののこの純真な瞳に死神を関する名前は似合わない。

ふむ、どうしたものだろうか？犬を撫でながら色々思案しているとふと出っ張ったものに触れた。どうやら犬のおでこにある出っ張りに触れたようでそこを中心に撫で繰り返すように触っていてふと思い付いた。

「……角端^{かくたん}」

黒い身体に角を持った獣と言えば角端だろう。簡単に説明すれば角端^{かくたん}とは黒い麒麟のことである。無論、首の長いゾウよりは好きじゃない麒麟のことではなく、中国神話の伝説上の動物。鳥類の長である鳳凰と並んで、獣類の長とされ、形は鹿に似て大きく背丈は5mあり、顔は龍に似て、牛の尾と馬の蹄をもち、雄は頭に角をもつとも言われる麒麟の方である。

グリム同様名前負けしているような気分にならなくもないが、何故かふと浮かんだのである。

「お前さんの名前は角端^{かくたん}だ」

尻尾を振っている犬の両脇へと手を入れ自分と同じ高さまで持ち上げて、犬にそう告げた。

無論動物である犬に言葉が通じるとは思っていないが、なんと

はなしに名付けられて嬉しそうに尻尾を振っているような気がして
少しかだけ頬を緩めて角端を下ろし大学へと向かった。

大学に行つたはいいが特筆するようなことは全くない。精々友人
の一人に絡まれた程度で、絡んできた瞬間に潰したが・・・授業も
終わり一緒に帰る友達もいないので一人で家に帰り、角端を愛でよ
うと我が家の扉を開く。

「アレ？What's happen？」

思わず英語が出るほど不思議な光景が目の前に広がっていた。
角端が分身の術を使用して色違いの分身を召喚したようなのだ。

角端そっくりな赤、青、白、黄色の犬どもが角端と共に一様に玄
関へと並び僕に構って構ってと上目遣いをしながらちぎれんばかり
に尻尾を振っている。ちょっと疲れているのかも知れない・・・
目の前に広がる現実を認めたくないあまりに目頭を揉みながら家の
中へと入り、皿を5つ並べその中へと餌を入れていく

認めたくないと思っている割には餌付けをするなんてあまりにも
バカ過ぎると内心自身を馬鹿にするように鼻で笑い、餌に貪りつい
ている5匹を眺めて

「左から角端かくたん、炎駒えんく、聳孤しょうこ、索冥さくめい、麒麟きりんな」

角端と同じように麒麟にちなんで黒、赤、青、白、黄色に並んで
いる犬どもを呟くように勝手に名付けると角端を除いて一様に動き
を止めこちらを見上げてくる。あまりの一体さにビビりながらも睨

みかえすと今度は角端を含んだ全員が尻尾を振りこちらに突っ込んできた。

「おいっ!？」

犬たちの結構な勢いに驚愕しつつ犬たちを受け止めた瞬間

「・・・・・・・・・・はあ？」

大自然が広がっていた。

ごめん、意味が分からない。これが今僕に起きた出来ごとである。全く理解出来ないけれど!! 某奇妙な冒険にポルなんとかさんもびっくりな状況だった。

茫然自失になりながらも無理矢理頭を働かせ、微妙に傾斜があることからここが山であると推測しとりあえず山頂へと向かった。下手に降りて迷子になるより高い所から位置を確認した上で降りた方がいいだろうと踏んだ上での行動だったのだが・・・・・・・・

「やっちまったよアミー」

意味不明なことを言い出す程簡単に迷子になってしまった。安易にそこに山があるからの登山家みたいな軽いノリで登らずに降りた方がよかったのかもしれないと自身の選択を後悔しながらも沢山の花が咲き乱れている花畑を歩く。もちろん踏まないように

食べないものを無駄に殺生してはならないと婆ちゃんが言ってい

たからそれを守っただけだ。綺麗だから踏まないように歩いていたわけではない。

くだらない思い出に浸りながらもウロウロと綺麗な花を見ながら歩き回っているとどこからか小さな子供の泣き声が聞こえてきた。別に泣いていたのが気になったのではなく、単に現在地を尋ねたかったから近づいただけで他意などはない。

泣き声の聞こえる方向に向かってしばらく歩いていると花畑の真ん中で小さな緑色の髪をした9歳ぐらいの少女が泣いているのを発見した。泣きじゃくっている少女の前にはグチャグチャになった花畑があり、そのことから少女がそれを見て悲しくて泣いているのであると推測した。その上で今なお泣いている少女に近づきなるべく優しく話しかける。

「どうしたんだ少女？」

「ふえ？」

少女は僕に呼び掛けられると鼻水と涙でグチャグチャになった顔をこちらに向け、不思議そうに小首を傾げている。可愛い顔をしているのに鼻水と涙で最悪なことになっていた。簡単に言えばショートケーキに納豆が乗ってる感じだな。くだらないことを考えながらもこのままでは話にもならないのでしょうがなくポケットからハンカチを取り出し少女の顔を拭う。

「むぐっ」

顔を拭われた少女は僕の突然の行動に驚きながらも小さな声でありがとうと言っていた。ようやく落ち着いた少女を見据え何故泣い

ていたかを尋ねることにした。

「どうしたんだ？」

「につ人間？」

何故か僕の顔を見て目を見開き驚愕をあらわに質問に答えず質問で返す少女に軽くイラッとした瞬間手が動いていた。もう悪い手だ

「せいっ」

「あいたっ」

イラついた僕の自分勝手な右腕は勝手に動きとりあえず驚いている少女にチョップをした。

「質問に質問で返さない！」

「ふあい！」

「どうした？」

「・・・グスッだっ・・・誰かに私の・・・グスッ・・・お花畑を・・・スッ・・・グチャグチャにされちゃったの」

泣きながらもたどどしく事情を話す少女を優しく撫でる。撫でられた瞬間何故か慌てて「ふぁ」とか言っていたがそんなことは気にしない。撫でながらも顔を上へと向け空を眺めるふりをして少女に見えないよう苛立たしげに眉をしかめる。

「アホな奴もいたもんだな」

「えっ？」

軽く呟いたつもりだったのだが少女に聞こえてしまったらしい。顔を下げて下を見るとどうしてそんなことを言ったの？ 的な問い詰めるような催促の目をしている少女がいたので若干嫌そうや顔をしながら

「綺麗なものを壊すなんてそいつが綺麗じゃない証拠だろ？ 君が育てたこの花畑は綺麗なんだ。綺麗なものを理解出来ないなんてアホな証拠だ」

あまりにも僕らしくない思いなので言いたくなかったがキラキラした眼差しで見えてきたのでしょうかがなく少女にそう告げるととてもなく嬉しそうな顔をしている。どうやら自分が育てた花を褒められたのが嬉しかったようだ。少女がニコニコとこちらに笑顔を向けてきたのでなんとなく気恥ずかしくなり、多少乱暴に少女の髪を撫でる。

「わぷっ」

フツハハ大人をからかった罰だ！ 少女の髪を撫で続けていると、不意に少女が表情を暗くして俯きだしたので、空気を読んで動かしていた手を止めて再び少女に声をかけた。

「今度はどうしたんだ？」

「……………またお花畑をグチャグチャにさるると思うと悔しいの。お兄さんに褒められた私のお花畑がグチャグチャにされて……………何も出来ないことが悔しいの」

「……………」

「……………強くなればお花畑を守れるのかな？」

そう言つて顔を上げた少女の眼には泣いていた先程までとは全く違う強い意思が宿っていた。僕はその眼を見て無言にならざるをえなかった。何故ならば僕はこういう眼をした奴を知っている。そいつは自分よりも図体のデカイ馬鹿相手に一人で突っ込み、自分よりも人数が多い相手に一人で突っ込み、ズタボロになりながらも骨が折れながらも血まみれになりながらも、齒を食いしばり拳を握りしめて立ち向かつていった奴だった。この少女はそいつと……………僕のため一人の親友と同じ眼をしていた。僕があいつに勝つことは出来ないし、あいつのような眼をした少女に勝つことなど出来るわけもない。それに……………

「……………一度差し出した手は引つ込めることが出来ない」

「えっ？」

「なんでもねえよ」

ポンポンと柔らかく少女の頭を叩きため息をつきながら立ち上がる。やれやれアホな僕だ。

「分かった。……………戦つのも拳を握るのも本当なら死ぬほど

大嫌いだけど、しょうがないから君に喧嘩の仕方を教えてあげるよ」

「ふえ？」

手を貸すと言う僕の言葉が信じられないのか少女は驚愕しながら僕を見上げている。

「強くなる方法を教えてくれるの？」

「いんや、親友直伝の喧嘩の仕方だよ」

少女の質問にニヤリと邪悪に笑った。

「まず基本からな」

「何をするの？」

「図体のでかい奴の倒し方な」

「どうするの？」

「デカければデカい程足場が大事になってくるんだ。自分を支えるためのものが無くなったら大きさに関わらず大抵の奴は立ってられないからそれを利用するんだ」

「足を攻めればいいんだね!!」

「うむ、次は嫌な奴を懲らしめるやり方。『いい靴だな』って言い

ながら足を踏み付けてやって腹を殴るんだ」

「うん」

「そうすると足を踏まれた痛みで下に意識を向けてしまっし、その上足を踏まれてるから逃げようがないからかなりいい痛みを与えられる」

「分かったお兄さん！」

「今度やってみるといい。あああと野郎の倒し方」

「どうするの？」

「大抵の野郎は股を蹴りあげれば沈むから詳しい話はなしで・・・まあ軽く言えば死ぬほど痛い」

「・・・お兄さんも？」

「ああもち・・・なんだ？その好奇心に満ち溢れたキラキラした目は！？嫌だ！嫌だぞさすがに実験台とかにはなりたくは・・・アアアアアーーーーーっ！！」

「・・・お兄ちゃん」

「ん？どうした？」

「…………雷が怖くて眠れないの。一緒に寝て」

「…………はあしょうがないな。おいで」

「うん!!お兄ちゃん大好き!」

「今日ただぞ?」

「えへへ」

「次はダメだからな?」

「うん、お兄ちゃんそんなこと言ってるけどいつも一緒に寝てくれるもんね!」

「ぐっ……明日はお勉強の時間長くしょうか」

「ぐっお兄ちゃんヒキョウだよ!」

「大人は卑怯な生き物なんだよ。幽香ちゃんも大人になれば分かるさ」

「幽香はいい子だからそんな風にはならないもん!!」

「いやそういう娘に限って成長したら人をいたぶるのが大好きなドSな奴になるんだ」

「……………なんか実感が籠ってるね」

「・・・・・・・・・・ああ実験だからな」

「・・・・・・・・・・本当に妖怪つていたんだな。鬼とか初めて見たぞ、
というか食べるわけでもないのに殺生するのはどんな理由であれ
嫌なんだが」

「お兄ちゃんまだ信じてなかったの？甘過ぎるわよ、あいつらを逃
がしたらこの前みたいに大群でやってくるんだから」

「いやいきなり過ぎて理解もクソもなかったから。・・・・・・・・・・渋
々ながらも納得しておく」

「全く私も妖怪なのに何言ってるの？」

「・・・・・・・・・・はあ？」

「えっ？」

「なんじゃこりゃああああー！！！！！！！！！！っ！？」

「角が生えるなんてお兄ちゃん鬼だったのね」

「いや人間のはず。なんだよ青い角って！髪まで真っ青じゃないか
！？」

「それが本当の姿なんじゃない？」

「うおっ！？手が蹄に！？何故か四足歩行したくなってきた！！」

「馬みたいになってるよ？」

「僕は人間だっ！！」

「……………いい加減妖怪だつて認めなさい。人間には木をへし折ることなんか出来ないんだから」

「僕の婆ちゃんはやつてたんだが？」

「……………。」

「あつ戻った」

「……………もう何も言わないわ。アイスが食べたい」

「……………了解」

「ねえ」

「なんだ幽香ちゃん？」

「……………。なんか必殺技的なのないの？どうしても火力がかけるんだけど」

「そうは言われても僕は元人間だったからな。妖力の使い方なんぞ知らん」

「……役に立たないわね。まあ元々あんまり期待はしてなかったけど」

「ああでも婆ちゃんから必殺技を習ったことがあるな」

「……………アンタの婆さんって人間よね？」

「多分」

「どうして人間に必殺技なんか必要なのかしら？むしろ否定しないアンタが不思議なのだけれど？」

「よく拳一つで熊とか倒してたからなあ」

「……………人外ね。まあとりあえず教えなさい」

「分かった」

「……………何このふざけた技は？」

「必殺技？ちなみに硬さとか腕力も全て人間の力で放ってこれだから」

「普通の人間には大木を拳一つでへし折ることは出来ないわ」

「婆ちゃんはこれより大きな木を倒してたような気が……」
それに、ほら人間が放つと拳が潰れるから」

「確かに右手がグチャグチャになってるわね……アンタの婆さんは？」

「……無傷」

「間違いなく妖怪よ」

聞いてくれ

すごい異常事態に気づいたんだ。

「……身体が年取ってねえ」

ぶっちゃけ人生15回分ぐらいは経ったんじゃないかな？少女と出会ったあのあととりあえず山を降りたことがなく一人で住んでいたらしい少女を連れたまま山を降りて人里を探したのだが一向に見つからなかったのでしょうがなく山へ帰り、花畑の近くにあった少女の家にお世話になることになった。で何年か経って再び確認しに行くと言頭衣をきた人々が沢山おり……。どうみても僕がいた時代ではないことが理解出来た。最初はドッキリとかかと思っただが、喧嘩の仕方を教えたりしている内に

「あら考え事なんかしてていいの？」

――轟――

ヒュボツ

「チツ・・・やっぱりいらつくわ」

まずは身体の異常に気づいた。

「・・・・・・・・・・それ、解きなさいよ」

「嫌だ。解いたら殴りまくる気だろう」

今現在お腹に穴が空いてますがもーまんだい無問題。身体が実体ではなくすることが出来るようになった。言うなれば『五行と化す程度の能力』

五行とは水金土火木の自然の基本的な要素を表しており、僕はそれと一体化し自在に操ることが出来るのである。具体例をだせば某海賊漫画の自然系能力者ロギアと言ったところだろうか。果てしない時間の中で絶え間無い研鑽を積みつづけかなり能力をだいたい掌握することが出来た。今現在は五行を更に変化させることにより木行を変化させた『木行変化：風行』と身体を風に変化させ、殴り掛かってきたアホ娘の拳を空振らせたわけだ。

「これじゃストレス発・・・修業にならないじゃない」

「おい本音が零れたぞ」

ちなみにこの口汚い娘はあの泣きまくっていた女の子であり名前は風見幽香。あの頃はあんなに可愛かったのに・・・

「ちょっと汚らしい視線を向けるの止めてくれないかしら？」

こんな娘に育ちました。成長した娘が反抗期に入っただけの父親の気持ちがよく分かったな、昔は「お兄さんじゃなくてお兄ちゃんって呼んでいい？」とか「お兄ちゃん大好き」とか「お兄ちゃんあゝんして」とか可愛いげがあっただのに・・・

「さあさつさと続きをしましょう」

今じゃ立派な女王様です。・・・はあ、あの可愛い幽香ちゃんはどこに行っただろうか？なんだよ妖怪って・・・
・というかいつの間にか僕自身が妖怪になってたし

「来ないならこっちから行くわよ！」

――疾！――

ヒュッ！！

頬を掠めた拳をそのままに、突き出された腕を掴み地面にたたき付ける。あの日から何回も戦っているがいまだに負けたことはない。最初は妖怪だと知らなくて手を抜いていたからわりと死にかけたがその瞬間に能力に目覚めたのでなんとか勝てた。

能力に目覚めても能力に気づいてなかったんだけどなH a h a h a
a

左腕を消し飛ばされてから能力に気づいたんだ。無くなった先端が燃えてるんだぜ？まじでビビった。

幽香ちゃんと戦っている間に何回か旅に出ようとしたのだが、上目遣いでシャツを捕まれては行くことも出来ず。大きくなってからは出ようとした瞬間に問答無用で殴り掛かってくるので始末にいけない。一回だけ内緒で出掛けたら一週間口を聞かずに僕の裾をずっと握っていた。

「・・・はあ。旅をしたい（ボソッ）」

ため息をつきながらも小さな声で愚痴を言いつついまだ嵐のように攻め立ててくる幽香ちゃんの攻撃をかわし、受け流したりしていた。呟いた瞬間に幽香ちゃんがぴくりと身体を震わせたことには気づかずに

「随分余裕ね？」

その態度が気にいらなかったのか、幽香ちゃんの連打の速度が更に増していく

身体の異変に気づいたある日。なんととはなしに幽香ちゃんから告げられた一言を聞いて愕然とした。

『あっお兄ちゃんやっぱり妖怪だったんだね！！』

小一時間ぐらい問い詰めたかった。いつ自分が妖怪になったのかとか・・・まあすぐに順応した自分の適応能力の高さを褒めてやりたくなっただが。その直後に角が生えれば納得せざるをえない

わけだがH a h a h a

かわしているうちにそろそろ鬱陶しくなってきた。幽香ちゃんの攻撃をかわしながらも軽くいらついていたのでとりあえず勝敗をつけることにした。

『水行変化：氷行・氷鏡』

五行の一つ水行を発動させる。水の水温を下げて凍らせそれを鏡のように扱い、ミラーハウスのように多数の虚像を生み出し幽香ちゃんを攪乱する。

「くっ」

実体の分からないことに焦り、迫ってくる氷を見回す幽香ちゃん。しかしキョロキョロしている間にすぐさま後ろへと周り拳を背中に当てた。このまま倒すことが出来るのでこの勝負は僕の勝ちというわけだ。

「はい僕の勝ち」

「ふんっ」

勝敗が決したので氷を溶かして空中に霧散させていると幽香ちゃんはまた負けたことが気に入らなかったのかめちゃくちゃ大きな舌打ちをした後にこちらを睨みつけてそのまま「花の世話をしてくれる」と言っただけで花畑へと向かっていった。

負けず嫌いのあの娘のことだから間違いない、僕を倒すために訓練しているのだらうと予想し頭を掻く。正直能力がなきゃ勝てない

と思う。というか強すぎるだろ幽香ちゃん

この前20mぐらいある巨人のドテツ腹に一撃で風穴開けてたぜ？正直引いた。まあでもわりと暴力的ではあるが、いい娘ではある（断定）。

いい娘じゃない娘がわざわざ僕のために料理を作ってくれたらどうか？否、断じて否！！それに、前に切るのが面倒で伸びっぱなしだった前髪をあげるヘアバンドをくれたりと、あんないい娘みたことない！！ヘアバンドは今も愛用してるし、お返しに日傘を作ってプレゼントしたら今でも使ってくれてるし

ああウチの娘めっちゃ可愛い！！彼氏とか連れて来たらリアルに『僕を倒したら交際を認めてやる！！』とか言いそうだ。というか言うぜ！ボッコボコにしてやんぜ！！

幽香ちゃんの可愛さに軽く暴走しながらも能力を操る練習を始める。目指すは『五行』の全同時発動。今は三つまでなら同時に発動出来る。他には五行を組み合わせて新しい行を作ったりとわりとやることは多い。

五行を操ると言うことは自然全てを操ることに等しい。つまりちゃんと制御出来れば万物を操れるはずなのだが・・・五行全てを操ると身体が爆発する。身体が飛び散っても自動で身体が再生する便利なマイボデー。ちなみに治るの見たらかなりグロかった。

まあなんだかんだで修業をしているわけなのだが、そろそろ山を降りて色々な所を回りたい。この前見たときはあからさまに弥生時代っぽかったからそろそろ飛鳥時代ぐらいにはなっているはずだ。元

の世界に戻るかはともかく、人との情報網を繋げるといのはわりと重要なことだから早く人間に会いたいのだが……ウチの娘が……

ああ思考がループし始めた。キャパシティーの小さい自らの脳みそを罵倒しながらも手慰みに水で出来た球を弄んでいると

「ねえ」

いつの間にか帰ってきていた幽香ちゃんが真面目な顔をしてこちらに話し掛けてきた。とりあえず水を空中から霧散させ幽香ちゃんへと向き直り真剣な眼差しを向ける。

「旅に出ていいわよ……その代わり『大槍』を私に撃ちなさい」

旅に出ていいのは喜ばしいことだが……我が愛しの妹君はアホなことを吐かし始めた。『大槍』とは婆ちゃんから習った異常で非情な必殺技のことである。婆ちゃんは『落門大槍』、門を落とす大槍と呼んでいた。僕はそれに五行の力を加えて有り得ない威力の必殺技として作り変えたわけなのだが……妹君は自分にそれを撃つてとおっしゃっている。

「嫌「撃たないと一生アンタを赦さないわ」……………どうしてだ？」

「これは決別の為の儀式よ」

「はあ？」

「私はいつまでもアンタにおんぶに抱っこなのは気に入らないわ。」

だから私はアンタを越えたい。でも今はまだアンタに勝つことは出来そうにないわ。だから最後に私はアンタの必殺技をこの身に刻みつけてアンタを越えたい」

力強く燃え盛る炎のような意志を秘めてこちらを見つめてくる幽香ちゃん。でも……

「僕には撃てな」知っているわ。アンタは馬鹿みたいに優しいもの。アンタが私に本気で『大槍』を撃てないことぐらい理解してるわ。……それでも私は撃って欲しい。私の家族の最強最大の一撃を知りたいの」……幽香ちゃん

俯きながら拳を強く握り締める。撃ちたくない、けれど妹がこんなに必死に頼み込んでいるのを断れるのか？でも幽香ちゃんに、妹に『大槍』なんか撃てるのか？

「撃ちなさい！！撃たないと私はアンタを一生軽蔑するわ！！」

「……僕は軽蔑されても幽香ちゃんを傷つけたくなんかない」

「……撃つてよ。撃ちなさいよ！！」

「くっ……」

言われるがまま拳を振り上げ、そして……

「……無理だ」

何もせずに拳を降ろした。

僕に幽香ちゃんに向けて『大槍』など撃てるわけがないのだ。たとえ一生の願いであろうと撃たなければ殺すと言われても、軽蔑されようとも撃てるわけがないのだ。

「っ・・・・・・・・さい」

幽香ちゃんはそれを見て何故自分に撃たなかったのかと激怒し、眼に怒りを込めて親の仇を見るような一生赦さないというような目で僕を睨みつけ

「出ていきなさいっ!!」

そして僕は山から追い出された。

《続く》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0083q/>

東方空繰殿

2011年1月11日21時04分発行